

**医学獣医学総合研究科（修士課程）
自己点検・評価報告書**

設置(又は改組実施)年度：平成26年度

平成29年3月

宮崎大学医学獣医学総合研究科

【目次】

- 第1章 平成26年度設置又は改組の目的と経緯
- 第2章 沿革・設置目的及びミッション
 - 第1節 沿革及び設置目的
 - 第2節 ミッション
- 第3章 ミッションを実現する活動状況
- 第4章 活動状況の自己点検評価
 - 第1節 教育活動
 - 1. 教育の目的と特徴
 - 2. 自己点検評価
 - 分析項目1. 教育活動の状況
 - 1-1. 教育実施体制
 - 1-2. 教育内容・方法
 - 分析項目2. 教育成果の状況
 - 2-1. 学業の成果
 - 2-2. 進路・就職の状況
 - 分析項目3. 学生支援の状況と成果
 - 第2節 研究活動
 - 1. 研究の目的と特徴
 - 2. 自己点検評価
 - 分析項目1. 研究活動の状況
 - 分析項目2. 研究成果の状況
 - 第3節 社会連携・社会貢献活動
 - 1. 社会連携・社会貢献の目的と特徴
 - 2. 自己点検評価
 - 分析項目1. 社会連携・社会貢献活動の状況
 - 分析項目2. 社会連携・社会貢献活動の成果
 - 第4節 国際化活動
 - 1. 国際化の目的と特徴
 - 2. 自己点検評価
 - 分析項目1. 国際化活動の状況
 - 分析項目2. 国際化活動の成果
 - 第5節 管理運営体制及びその他
 - 1. 自己点検評価
 - 分析項目1. 管理運営体制及びその他の状況
- 第5章 設置又は改組による成果

第1章 平成26年度設置又は改組の目的と経緯

我が国の大学院教育に関しては、中央教育審議会からの2つの答申、すなわち「新時代の大学院教育」（平成17年9月）及び「グローバル化社会の大学院教育」（平成23年1月）を踏まえ、平成23年8月には第2次大学院教育振興施策要綱が公表されている。この要綱の中では、グローバル化や知識基盤社会が進展する中、大学院教育の質の保証・向上を図りながら、大学院修了者の活躍の視点を重視し、国際的に通用する教育研究拠点としての大学院の役割が求められている。本学は、平成15年10月の（旧）宮崎大学と宮崎医科大学の統合後、「世界を視野に、地域から始めよう」のスローガンの下、多様な地域社会のニーズと国際的通用性に応えるべく、学際的な生命科学、環境科学に特色を持つ大学の創造を基本理念としてきた。そのため大学院教育では、異分野融合型の高度な教育・研究の推進を目指し、大学院研究科の組織再編を積極的に進め、平成22年4月には医学系研究科（博士課程）を発展的に改組・再編し、同時に山口大学大学院連合獣医学研究科から宮崎大学のかかわる部門を分離再編し、国内で初めて医学と獣医学とが融合した博士課程、医学獣医学総合研究科を設置した。その設置時の具体的な必要性は次のようなものであった。

- (1) 本学が国内最大の家畜生産を誇る南九州に立脚していること、
- (2) 新型インフルエンザなどの人獣共通感染症の制御には医学・獣医学の両方からのアプローチが必要であり、両分野が連携した高度専門職業人の養成が必要になってきたこと、
- (3) 生命科学的研究において必要不可欠な種々の実験動物を熟知した人材の教育には、医学系と獣医学系が協働して教育研究を行う体制が求められていたこと、
- (4) 新医薬品などを実用化するためには、中・大動物を用いたトランスレーショナルリサーチを展開できる人材を養成する必要があること、
- (5) 高度医療の進展に伴い、ヒト医療のみならず、動物医療においても、先進的な技術（再生医療や遺伝子診断など）が必要になってきたことである。

また、平成22年度に設置した医学獣医学総合研究科博士課程では、教育・研究体制を整備し医学と獣医学が融合した教育・研究に取り組み、実績を積み重ねるとともに、地域社会の課題解決に取り組んでいる。具体的な主な取り組みは、次のとおりである。

（教育面）

生命科学、医学・獣医学に関する講義、演習、実習を行っている。

さらに、学会発表形式のサイエンスコミュニケーション特論では、医学系・獣医学系双方の学生が発表者・オーガナイザー・オーディエンスとして授業に参加し、進めている研究の課題について口頭発表・議論を行っている。

また、先端的医学獣医学特論では、医学及び獣医学分野において先駆的研究を行っている国内外の研究者を講師として招き、最新の研究データや最先端技術などを紹介している。これらの授業などから、医学及び獣医学分野の知識を深め、研究の進展に役立てている。

（研究面）

平成22年度に文部科学省特別教育研究経費「医学獣医学融合による統合動物実験研究プロジェクト(H22-26)」が採択されたほか、医学獣医学の共同サブプロジェクトとして23件を実施し、業績を積み重ねている。

現在、生命科学分野の急速な進歩、医学・獣医学の医療現場の高度化、そして両分野にまたがる社会問題が発生している中、今後の医学・獣医学領域における総合的な発展と我が国有数の家畜生産地域への貢献を実現するためには、獣医師ではない畜産関係者へも教育の裾野を広げ、両分野の知識を携えて、柔軟で合理的な思考能力、俯瞰力、独創力を備えた人材をより幅広く養成することが求められている。

また、医療及び関連教育現場の高度化・多様化は、それをサポートするための高度専門職業人としての教育を受けた医療支援者（コメディカルスタッフ）も必要としている。

このような社会的要請や、医学獣医学総合研究科博士課程の実績を踏まえ、医科学看護学研究科を再編し、これまでの医科学専攻（修士課程）の教員に獣医学系の教員を加えて、国内唯一の医学と獣医学が融合した医学獣医学総合研究科に新たに医学獣医学の修士課程を設置する。本課程では、医・歯学部や獣医学科以外の他分野から学生を確保し、これらの人材が持っている多様なバックグラウンドと医学・獣医学とを有機的に結びつける教育を行う。医学獣医学総合研究科博士課程の教育プログラムとの連動も図り、修了後には医学獣医学総合研究科博士課程への進学や、当該領域における教育支援、地域の産業振興や医療支援において中核人材として活躍できる人材の輩出を目指す。これにより、地域社会のニーズに応えるとともに、医学と獣医学が融合した教育・研究をこれまで以上に推進し、本学の基本理念に沿ったさらなる発展を目指す。

第2章 沿革・設置目的及びミッション

第1節 沿革及び設置目的

医学研究科博士課程は、昭和55年度に設置し、平成15年度に修士課程を設置した。平成17年度に看護学専攻を設置したことに伴い、医学系研究科に名称変更した。

さらに、平成22年4月に博士課程と山口大学大学院連合獣医学研究科から本学にかかわる部門を分離し、国内で初めて医学と獣医学とが融合した博士課程、医学獣医学総合研究科を設置した。これに伴い、医学系研究科修士課程の名称について、修士課程2専攻（医科学専攻・看護学専攻）の趣旨・目的を表した医科学看護学研究科に名称変更した。また、医学獣医学総合研究科博士課程設置計画の時点で、医科学専攻（修士課程）を移行することも検討したが、まずは博士課程の設置・運営に全力を尽くすため、修士課程の設置については、今後検討することとしていた。

医科学専攻は、将来、基礎医学研究を担う研究者、高度専門職業人を育成することを目的に平成15年4月に設置され、理学、農学、薬学（4年制）などの自然科学系4年制学部卒業者を中心に受け入れてきたが、常に一定の需要はあるものの、恒常的に学生充足率が低い状況が続いていた。加えて博士課程が学部横断的に医学獣医学総合研究科に改組されたことにより、修士課程と博士課程における教育・研究分野の一貫した連続性が外部から見えなくなってしまう。一方、生命科学分野の急速な進歩及び診療現場の高度化・多様化、我が国有数の家畜生産地域である地域社会の特性、社会のグローバル化に伴う人獣共通感染症を含む様々な感染症の国境を越えた広がりなどを受け、医学及び獣医学の知識を持ち科学的かつ合理的な対応が可能な人材養成を地域社会から求められていた。

大学院博士課程として、我が国唯一の医学獣医学総合研究科を持つことは本学の特色であり、医学と獣医学が融合した各種の教育・研究プロジェクト等に取り組み、医学科と獣医学科の教員が協力して実績を積み重ねてきた。この本学の特色と強みを考慮すると、上記したような現行の医科学専攻が直面している定員充足率及び博士課程との連携に関する課題と地域社会からの要請への対応は、医科学専攻（修士課程）を廃止し、医学獣医学総合研究科の中に、医学と獣医学が融合した医科学獣医科学専攻（修士課程）として新たに設置し、人材の需要と地域の要請に十分に配慮した教育課程と定員数を設定することにより、解決が可能であることから設置を進めることとなった。

この新たな専攻設置の具体的な必要性と念頭に置かねばならない課題としては、次のようなことが挙げられた。

- (1) 医学獣医学関連領域の研究を対象とし、博士課程に進学する学生を見据えた一貫教育を実現できる医学と獣医学が融合した教育課程が国内には存在しないこと。
- (2) 人獣共通感染症や口蹄疫など医学獣医学に共通した社会問題が急増してきたにもかかわらず、これに対応できる人材を育成するような医学と獣医学が融合した修士課程が国内には存在しないこと。
- (3) 医学や獣医学に関連した修士課程への進学希望が、海外、特に東南アジアや中国から寄せ

られていること。

(4) 東南アジアなどの6年制未満の獣医学系大学の学部卒業生で獣医学博士課程進学を希望する学生は入学に必要な修業年限が不足しているため、これまでは先ず農学研究科修士課程で受け入れざるを得ず、本人が希望する分野とは専門性が異なる講義や演習も受けなくてはならなかったが、医科学獣医科学専攻（修士課程）を設置することにより、最初から医学獣医学総合研究科で受け入れることが可能となり、本人が医学獣医学総合研究科博士課程で希望している医学と獣医学が融合した教育を修士課程から学ぶことが可能となること。

(5) 創薬研究や安全性試験を行っている民間企業などからは、修士号を持ち中・大動物実験に精通した人材養成を望む声があること。

(6) 地域の医療現場で専門的技能者として働くコメディカルスタッフがより高度な専門知識の修得を目指すための社会人教育の場は、引き続き必要であること。

(7) 先端医療研究、医薬品開発、臨床研究などを迅速かつ安全に推進するために、被験者に対するより一層の安全性や人権の保護といった「倫理性」を確保し「生命倫理」に精通しコーディネーターとして活躍する人材が必要とされていること。

医科学看護学研究科の医科学専攻を医学獣医学総合研究科の修士課程として移行することで発展的に廃止するとともに、新たな修士課程（医科学獣医科学専攻）はこれまでの充足率を踏まえた定員とし、今まで以上に入学希望者のニーズにきめ細かに対応するために、本専攻独自のコースを含めた3つの教育コースを設定し、地域社会のニーズにも応えることとしている。

第2節. ミッション

1. 教育

医学獣医学総合研究科は全国唯一の医学と獣医学が完全に融合した研究科であり、他大学にも見られる様な単に医学と獣医学の協働研究を意図するものではなく、教育、地域・国際貢献あるいは管理運営すべてを共同で行うものである。そのため、双方向からの融合した実質的教育が実施され、例えば人獣共通感染症においては、人（医学が対象）および家畜などの動物（獣医学が対象）の感染症を医学と獣医学の立場から教授できるようになっている。このような医学と獣医学が融合した教育を通して、複眼的視野を有した指導能力のある人材を養成する。また国外からの留学生の受け入れ実績や若手頭脳循環プロジェクトの実績等を活かし、グローバルに活躍できる人材を育成する。

2. 研究

これまでの21世紀 COE プログラムでの医学と獣医学の融合実績やペプチド研究やゲノム研究等による多数の共同論文（Nature 他）の発表実績を活かし、特色ある世界レベルの先端的な研究を推進する。また医学の先進的な医療技術を獣医学へ提供し、獣医学の高度な動物実験を医学に提供するなど双方向で技術提供の実績や、小動物から大中実験動物まですべての動物を扱える実験施設を利用し、基礎から臨床へのトランスレーショナルリサーチの展開を推進する。

3. 地域社会・国際貢献

医学獣医学総合研究科の教員をベースに設置した産業動物防疫リサーチセンターによる感染症防止の国際シンポジウムの実績や JICA プロジェクトなどの実績を活かし、社会・国際貢献を推進する。また、フロンティア科学総合実験施設や産業動物教育研究センター等の地域との共同利用実験施設等による地域貢献を推進する。加えて「宮崎県独自の周産期医療ネットワークを基盤とする多面的研究体制の構築と発達期脳障害の病態解明の推進」事業や口蹄疫復興プロジェクトによる産業動物復興支援事業の実績、東九州メディカルバレー事業等の実績を活かし、地域貢献を推進する。

4. 学びなおし

医学獣医学総合研究科では、医学・獣医学の分野で活躍している社会人を多く受け入れてい

る実績を活かし、学びなおしを推進する。また、長期履修制度の実績や週末（土、日）での講義実績を活かして、社会人が通常より余裕を持って履修し、大学院を卒業できるように配慮する。さらに、公開講座や研修などを通して社会人の学びなおしを推進する。

第3章. ミッションを実現する活動状況

1. 「教育」のミッションを実現する活動

医学系と獣医学系の教員が協働して、それぞれの得意分野・専門分野について教育を行うことで医学と獣医学の融合という研究科の特色に則った、高い専門性に基づいた幅広い講義を実施している。

2. 「研究」のミッションを実現する活動

文部科学省特別経費「医学獣医学融合による統合動物実験研究プロジェクト-Integrated Research Project for Human and Veterinary Medicine- -動物実験の有効活用を核とした基礎・橋渡し・臨床研究のスパイラル展開によるヒト・動物疾病に対する予防・診断・治療法の開発と人材育成-」（平成22～26年度）の実績を生かし、外部資金等を活用した研究を推進している。

3. 「地域社会・国際貢献」のミッションを実現する活動

教員の特色を生かした公開講座・セミナー・シンポジウムを実施している。また、地域貢献活動を調査し、実績について報告を行っている。

秋入学の導入や「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」（採択課題名「アジアの感染症研究・対策を先導する人材育成医学獣医学融合プログラム」）を活用し、留学生の受入を推進している。

4. 「学びなおし」のミッションを実現する活動

社会人学生のための長期履修制度及び夜間履修制度を生かし、学生が勤務と両立できるよう対応している。

第4章. 活動状況の自己点検評価

第1節. 教育活動

1. 教育の目的と特徴

国内では初めて医学と獣医学が連携・融合して設置された大学院あり、これまでの医学と獣医学それぞれで培われてきた教育・研究実績を踏まえて、それらを連携・融合することにより、今までは得られなかった両分野における知識、研究能力を身につけることができることを特色としている。

また、グローバル時代の課題である食料問題や新興・再興感染症対策を始めとする医学・獣医学にまたがる諸課題を解決できる人材を養成することも特徴としている。

このような教育・研究を通して、本研究科が立地する畜産基地からの要請に応えるとともに、人類の健康と福祉の向上に貢献することとしている。よって、各コースでは、以下を備えた人材を養成している。

(1) 生命科学研究者育成コース

医学・獣医学領域の生命科学研究者や教育者として活躍することができる人材を養成する。また、畜産関係者への教育により、修士修了後に、医学・獣医学の知識を持ち、科学的な思考で人獣共通感染症や口蹄疫などの感染症に対応し啓発活動ができる人材

(2) 高度医療関連技師養成コース

合理的、科学的な思考能力を有し、より高度で先進的な医療支援に携わることができる

人材、また、該当医療支援領域における後進の教育・指導に当たることができる人材

(3) 生命倫理コーディネーターコース

最新の医事関連法や省庁の倫理指針、関連諸学会の倫理ガイドライン等に精通し、それらを迅速に研究の現場、臨床の現場へフィードバックするための知識と能力を身に付けた人材

2. 自己点検評価

分析項目 1. 教育活動の状況

1-1. 教育実施体制

① 教育組織編成とその工夫

(1) 生命科学研究者育成コース (Training Course for Researchers of Life Science)

「生命科学研究者育成コース」は、将来は医学・獣医学領域の生命科学研究者や教育者として活躍することができる人材、また、研究心を持ち科学的な思考で人獣共通感染症などの感染症に対応できる畜産関連の人材を養成することを目的としています。このコースでは生命科学に関する広範な知識を学んだ上で、修了後の医学獣医学総合研究科博士課程への進学も視野に入れ、医学ないし獣医学研究における重要な基盤技術を修得し、自立した研究者として研究を行うための基礎を修得することが可能。

【学位】 修士（医科学）、修士（動物医科学）

(2) 高度医療関連技師養成コース

(Training Course for Healthcare and Service Innovation Professionals)

「高度医療関連技師養成コース」は、種々の医療現場における専門的医療支援技能者が、合理的・科学的な思考能力を修得し、また、より高度な専門知識と技術を修得することが可能。

【学位】 修士（医科学）

(3) 生命倫理コーディネーターコース (Training Course for Bioethics Coordinator)

「生命倫理コーディネーターコース」は、生命科学や医療における倫理コンサルトに関する基礎知識と専門的スキルを修得することを目的とする。希少性のある専門職業人として今後の社会ニーズが期待される専門知識と能力を修得することが可能。

【学位】 修士（医科学）

② 入学者選抜方法の工夫とその効果

○ 入学者受け入れ方針（求める人材像）

本専攻は、医学と獣医学を融合した高度な研究活動を実践している本研究科博士課程への進学を視野に入れた教育研究を行うものであり、また、地域社会の要請に応えうる人材の輩出を考慮した教育研究を目指すものである。そして、本専攻での修学は、医学・獣医学分野及び医療社会学分野の研究と教育、あるいは高度な診療支援に携われる人材の養成を主眼としている。

したがって、本専攻では、次のような人材を求めている。

(1) 生命科学研究者育成コース

将来、医学・獣医学領域の生命科学研究者としての道を志す農学、薬学（4年制）、理学、工学などの自然科学系学部卒業生、医療関連企業等で働く社会人及び畜産関係者。あるいは、社会的側面から医学・獣医学領域生命科学の課題や医療に関する研究を志す人文社会科学系学部卒業生や畜産関係者又は海外において6年制未満の課程を卒業した獣医学士。

(2) 高度医療関連技師養成コース

医療系専門学校や4年制大学学部を卒業後、専門職業人として医療現場で医療支援の実務に携わっている社会人。あるいは、将来、医療支援の実務に携わることを考えている4年制大学学部卒業生。

(3) 生命倫理コーディネーターコース

医療・福祉系の学部卒業生、農学、工学などの自然科学系学部卒業生、心理学、社会学、教育学、哲学、法学などの人文社会科学系学部卒業生など、幅広いバックグラウンドを持つ学部卒業生、及び臨床心理士や医療・看護・福祉関連の資格を有し実務経験と問題意識のある社会人。

○修士の入試状況は以下の表のとおりである。定員8名を大きく上回る志願者数となっている。

年度	専攻	定員	志願者	合格者	不合格者	入学者	入学者計
H26	生命科学研究者育成コース	8	13 (5)	12 (4)	1 (1)	12 (4)	16 (4)
	高度医療関連技師養成コース		2	2	0	2	
	生命倫理コーディネーターコース		4	2	2	2	
H27	生命科学研究者育成コース	8	14 (6)	14 (6)	0	14 (6)	15 (6)
	高度医療関連技師養成コース		0	0	0	0	
	生命倫理コーディネーターコース		2	1	1	1	

※ () 内は留学生で内数

○養成する人材像などが学生にとってより分かりやすいものとなるよう、平成26年度にアドミッションポリシーについて見直しを行い、各コースの必要性と養成する人材についてこれまでよりも具体的な内容に変更し、平成27年度募集要項に掲載した。また、新入生を対象にアドミッションポリシーについてアンケートを行い、回答者のうち82%の周知率であった。

③教育の質の改善・向上を図るための取組

- 本研究科では教育に関する自己点検・評価を実施し、継続的な自己点検評価及び教育改善を行っている。中期目標・中期計画による年度計画の実施状況を検証し、その結果は毎年度、自己評価報告書として取りまとめ、公表している。
- 大学教育委員会の下にあるFD専門委員会と各学部・研究科が情報を共有して、ファカルティ・ディベロップメントを企画し、FD研修会を実施している。
- 定期的に学生による授業評価を実施し、結果を教員にフィードバックすることで教育の質の改善・向上につなげている。
- 平成27年度から教員の教育活動の質の向上を目的とした教員間相互授業評価を開始している。

1-2. 教育内容・方法

①体系的な教育課程の編成状況

- 「研究基盤共通科目」については、専攻必修の講義として、5科目 10 単位を履修。ただし、生物系以外の学部出身者については基礎細胞生物学を含む6科目 12 単位を履修。
- 「研究基盤選択共通科目」について、3科目 6 単位以上を選択履修。ただし、生命科学研究者育成コースの者は医学獣医学総合研究科博士課程の2科目 4 単位（サイエンスコミュニケーション特論、先端的医学獣医学特論）、生命倫理コーディネーターコースの者は社会環境疫学・医療統計学、医療関連法規 2 科目 4 単位を選択履修。
- 「コース別研究科目」について、各コースに設定された演習・実習科目の中から3科目 6 単位以上、研究（8 単位）を履修。
- 高度医療関連技師・サービスイノベーション人材養成コースのうち、サービスイノベーション人材の研究指導を受ける者は「研究基盤共通科目」について専攻必修の講義として、5科目 10 単位を履修。「研究基盤選択共通科目」について、社会環境疫学・医療統計学又は医療関連法規のどちらか1つ及び医療サービスイノベーション論、医療サービス統計論、医療サービス知識創造論の4科目 8 単位を履修。「研究科目」について、医療サービス統計論演習、医療サービス知識創造論演習、医療サービスイノベーション演習Ⅰ、医療サービスイノベーション演習Ⅱ及び生命倫理コーディネーターコースの医療サービスサイエンス基礎演習の5科目 6 単位以上、研究（8 単位）を履修。

【修了要件】

修士課程に2年以上在学し、30 単位以上（生物系以外の学部出身者及びサービスイノベーション人材の研究指導を受ける者は32 単位以上）を修得し、必要な研究指導を受け、かつ本研究科が行う修士論文審査及び最終試験に合格することを修了要件とする。本専攻を修了した者には、修士（医科学）又は修士（動物医科学）が与えられる。

○教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

本専攻は、医学・獣医学の連携・融合した研究の基盤となる科目として「研究基盤科目」と「コース別研究科目」でカリキュラムを構成している。

(1) 生命科学研究者育成コース

本コースでは、研究基盤科目において生命科学の基盤的知識を教授し、その後、研究科目において、科学的な思考過程を涵養し、生命科学関連領域に関する研究方法の理論、情報収集方法などを学び、生命科学研究において修士論文作成のための研究指導を行う。

(2) 高度医療関連技師養成コース

本コースでは、種々の医療現場における専門的医療支援技能者が、合理的・科学的な思考能力を修得する。専門的技術学基礎演習では個々の専門医療支援領域に関する最新の動向と技術の理論について学び、その後、各専門分野で研究を遂行するために必要な基礎知識と技能を修得させ、それぞれの専門分野における研究テーマにより修士論文作成のための研究指導を行う。

(3) 生命倫理コーディネーターコース

本コースでは、生命倫理及び基礎医学に関する知識を修得した上で、医事法学、研究倫理・臨床倫理領域における最新の倫理指針や法律、社会環境疫学・医療統計学を学び、さらに専門的な倫理学的方法論、倫理的推論のプロセス、並びに倫理コンサルテーションのスキルを修得し、生命倫理領域における研究テーマにより修士論文作成のための研究指導を行う。

②学生のニーズ及び社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

本研究科においては、大学院設置基準第14条「教育方法の特例」を適用し、有職者が離職することなく修学することが可能となるよう、昼夜開講している。

なお、受講時間及び研究時間は指導教員との協議の上、設定することとしている。

また、長期履修学生制度を取り入れており、学生が職業を有している等の事情により、標準

修業年限（修士課程2年）を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し、修了することができる制度であり、希望者は、授業料を納入する前に長期履修生としての申請手続きをすることになっている。

社会人として勤務している学生が多いことから、講義を平日夜間に開講し、基本的に全ての講義を撮影のうえDVDに保存し、科目当たり出席回数が半分以上の学生、学会により出席できなかった学生に対して補講ができるように準備している。

なお、修士の社会人等の状況については、以下の表のとおりである。

入学年度	入学者数	社会人	夜間履修申請者	長期履修申請者
H26	16	9	8	2
H27	15	3	2	2

③養成人材像に応じた教育方法や自主的学習を促す教育指導方法の工夫

※教育課程の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻に本学の規定する修業年限以上在学し、指導教員の指導の下、所定の単位を修得し下記の各コースが目標とする専門研究者としての能力を身につけたことが確認され、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士の学位を与える。

(1) 生命科学研究者育成コース

- ・医学・獣医学領域の生命科学研究者や教育者、あるいは産業動物に関連する機関の職員として科学的な思考で人獣共通感染症などに対応し啓発活動が出来る能力
- ・海外において6年制未満の課程を卒業した獣医学士で、獣医学領域で研究者や教育者として活躍できる能力。

(2) 高度医療関連技師養成コース

- ・合理的、科学的な思考能力を有しより高度で先進的な医療支援に携われる能力
- ・該当医療支援領域における後進の教育・指導に当たれる能力

(3) 生命倫理コーディネーターコース

- ・生命倫理に精通し、先端研究や臨床研究に対応できる能力
- ・倫理的・法的・社会的に生命倫理の課題に対応できる能力

④国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

○医学獣医学総合研究科では、留学生も多いことから、平成22年度の大学院設置当初から、授業教材（スライド等）に英語での表記も加えている。また、講義においても英語での説明も必要に応じて取り入れる様、教員に周知している。

○研究基盤科目の1つであるサイエンスコミュニケーション特論（交流セミナー）では、全ての博士課程大学院生が自ら行っている研究課題についての口演発表を行っており、日本人学生も留学生も同様に、発表者、オーガナイザーを担当している。学会発表形式であり、国際学会のような雰囲気の中、研究発表やコミュニケーションのスキルを実践的に身に付けることが可能となっている。修士課程大学院生もオーディエンスとして授業に出席し、発表内容に関しての分析・検証を共に行っている。

平成27年度サイエンスコミュニケーション特論(大学院交流セミナー)開催計画

場所: 総合教育研究棟1Fプレゼンテーションホール・臨床講義室105

日時	発表者 / オークナイザー	所属講座	
5/15 (金) コーディネーター (山口教授)	発表者 NGUYEN VAN DIEP	獣医病理学	
	オークナイザー YUTTHANA PENGJAM	応用生理学	
	発表者 NGUYEN THI HOANG YEN	獣医寄生虫病学	
	オークナイザー HOMBUM AMY	寄生虫学	
	休憩		
	発表者 Happy Kurnia Parmatasa	腫瘍生化学	
場所 プレゼンテーションホール	発表者 BAATARSUREN BATMUNKH	組織細胞化学	
	発表者 BAATARSUREN BATMUNKH	組織細胞化学	
	発表者 NGUYEN VAN DIEP	獣医病理学	
	発表者 吉田 留美加	産業動物臨床繁殖学	
	発表者 中村 志保子	整形外科	
	発表者 中村 志保子	整形外科	
6/12 (金) コーディネーター (剣持教授)	発表者 吉田 留美加	産業動物臨床繁殖学	
	発表者 中村 志保子	整形外科	
	発表者 中村 志保子	整形外科	
	発表者 吉田 留美加	産業動物臨床繁殖学	
	休憩		
	発表者 西園 隆三	循環体液制御学	
場所 臨床講義室105	発表者 尚 潮達	物質科学	
	発表者 尚 潮達	物質科学	
	発表者 尚 潮達	物質科学	
	発表者 松元 文孝	脳神経外科学	
	発表者 松元 文孝	脳神経外科学	
	発表者 松元 文孝	脳神経外科学	

日時	発表者 / オークナイザー	所属講座	
7/10 (金) コーディネーター (片本教授)	発表者 末金 彰	腫瘍生化学	
	オークナイザー 山本 晃士	顎顔面口腔外科学	
	発表者 有村 慶一	顎顔面口腔外科学	
	オークナイザー NGUYEN VAN DIEP	獣医病理学	
	休憩		
	発表者 北崎 宏平	産業動物内科学	
場所 プレゼンテーションホール	発表者 横倉 悠輝	免疫感染病態学	
	発表者 河野 清香	生理活性物質探索病態解析	
	発表者 北崎 宏平	産業動物内科学	
	発表者 谷口 優子	獣医公衆衛生学	
	発表者 西村 征憲	構造機能病態学	
	発表者 西村 征憲	構造機能病態学	
9/4 (金) コーディネーター (丸山教授)	発表者 NGUYEN VAN DIEP	獣医病理学	
	休憩		
	発表者 倉澤 美智子	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	
	発表者 吉成 安恵	応用生理学分野	
	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	
場所 プレゼンテーションホール	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	
	発表者	(都合により中止)	

日時	発表者 / オークナイザー	所属講座	
10/31 (土) コーディネーター (山口教授)	発表者 延生 卓也	獣医生理学	
	オークナイザー 金丸 愛	腫瘍・再生病態学	
	発表者 金丸 愛	腫瘍・再生病態学	
	オークナイザー 延生 卓也	獣医生理学	
	休憩		
	発表者 ANGELINE TEH PING PING	獣医病理学	
14:10 ~ 14:40	発表者 劉 曉	物質科学	
	発表者 横田 敦子	循環呼吸・総合外科	
	発表者 ANGELINE TEH PING PING	獣医病理学	
	休憩		
	発表者 中原 梢	泌尿器科学	
	発表者 中村 恵理子	構造機能病態学	
15:50 ~ 16:20	発表者 上地 珠代	フロンティアRI	
	発表者 高澤 建	獣医機能生化学	
	休憩		
	発表者	実施なし	
	発表者		
	発表者		
17:00 ~ 17:30	発表者	実施なし	
	発表者		
	発表者		
	発表者	実施なし	
	発表者		
	発表者		
場所 臨床講義室105	発表者	実施なし	
	発表者		
	発表者		
	発表者	実施なし	
	発表者		
	発表者		

日時	発表者 / オークナイザー	所属講座	
11/28 (土) コーディネーター (片本教授)	発表者 中村 憲一	消化器血液学	
	発表者 Siree Asvapromtada	獣医薬理学	
	発表者 Siree Asvapromtada	獣医薬理学	
	発表者 末金 彰	腫瘍生化学	
	休憩		
	発表者 齋藤 清貴	脳神経外科学	
14:10 ~ 14:40	発表者 KHIN MAUNG LATT	獣医公衆衛生学	
	発表者 Mst. Arzuba Akter	微生物	
	発表者 Sayed Ahmad Nazhat	産業動物臨床繁殖学	
	休憩		
	発表者 越田 智広	麻酔生体管理	
	発表者 Ahmad Farid Nikmal Azizi	獣医解剖学	
15:50 ~ 16:20	発表者 馮 凱	獣医寄生虫病学	
	発表者 有川 玄樹	産業動物伝染病防疫学	
	休憩		
	発表者 清水 浩一郎	神経呼吸内分分泌代謝学	
	発表者 長谷川 和哉	生理活性物質機能解析	
	発表者 長谷川 和哉	生理活性物質機能解析	
17:00 ~ 17:30	発表者 田川 友梨	顎顔面口腔外科学	
	発表者		
	発表者		
	発表者		
	発表者		
	発表者		
場所 プレゼンテーションホール	発表者		
	発表者		
	発表者		
	発表者		
	発表者		
	発表者		

○平成24年度に文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「地域の医療現場と協働したサービス・イノベーション人材の育成」が採択され、修士課程において社会人を対象とした医療サービス・イノベーションを主導する人材育成プログラムを創成することを目的として、久留米大学、北陸先端科学技術大学院大学と協力しながら教育にあたっている。よって、本取組の成果として、平成28年度より大学院修士課程に医療サービスイノベーション人材育成のためのコースを設置することを決定し、高度医療関連技師養成コースを高度医療関連技師・サービスイノベーション人材養成コースに名称変更を行った。

分析項目 2. 教育成果の状況

2-1. 学業の成果

①履修・修了状況から判断される学習成果の状況

学位論文審査及び最終試験は、研究科長が指名する審査委員（主査1人、副査2人）をもって構成する審査委員会が行い、また、学位論文の口頭発表は、公開により行うこととしている。

平成27年度は修士課程において第1回目の修了生が出ることとなり、14名の修了予定者のうち、13名が学位を取得して修了しており、このようにはほぼ全員が予定通り修了できたことは、研究科における教育および研究指導が適切に行われているものと判断できる。

②学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

本研究科修士課程においては、全科目において授業評価アンケートを実施しており、その結果については、研究科委員会において報告を行い、今後の授業の改善等の参考としている。

また、学生による授業評価アンケート結果については、以下の回答を得ており、各教員の指導方法については、学生の満足が得られていると考えられる。

今後もアンケート実施により、工夫改善を進めていくこととしている。

学生による授業評価アンケート結果(非常に優れている又は良いの割合)	
1) 講義はよく準備されていたか	92%
2) 研究に対する熱意が感じられたか	92%
3) 質問をしやすい雰囲気であったか	87%
4) 明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	91%
5) 研究室に対する意欲が刺激されたか	83%
6) 重要事項が強調されていたか	92%
7) 講義であなたの知識が増えたか	88%
8) あなた自身の学修態度を自己評価してください	82%

2-2. 進路・就職の状況

学生に占める社会人学生及び留学生の割合が高く就職支援の必要性は低いが、学生からの相談があれば随時、相談に乗って支援を行っている。

また、学位取得後のキャリア形成への支援を目的とした「キャリア支援講演会」を農学工学総合研究科と合同で実施している。

分析項目 3. 学生支援の状況と成果

①履修・学習の支援の状況と成果

本研究科修士課程では、講義を平日夜間に開講している。講義は基本全て撮影し、DVDに保存、講義全体の半分以上出席した学生や学会で出席出来なかった学生に対して補講ができるように準備している。

参考として、博士課程の高度臨床医育成コースについては学生からの要望により、土日開講を平日夜間開講に変更している。

②学生生活の支援の状況と成果

本研究科修士課程では、経済支援の一貫として、TA制度を設けている。(博士課程においては、TA・RA制度)

TAにより教育に携わることで、教育経験を積み実践力の育成に努めている。学生の報告書からも教育力の養成になっていることが認められている。

③就職支援の状況と成果

所属する学生の多くは社会人であり、また、留学生は修了後に母国に帰国して職を得る者も多いことから、就職支援を必要としている者は少ない状況である。そのため、就職に関するサポートは各人の状況に合わせて個別に指導教員が相談に応じており、学生からの申し出があれば、木花キャンパスにある就職相談室の利用も勧めている。

第2節. 研究活動

1. 研究の目的と特徴

医学獣医学総合研究科は、医学と獣医学の極めて密接な学問的背景とこれまでの連携協力の実績ならびに本学が日本でも有数の畜産県に立地しているという特色を踏まえて、平成22年4月に設置された。よって、その研究目的と特徴としては、以下のことがあげられる。

○これまでの21世紀COEプログラムでの医学と獣医学の融合実績やペプチド研究やゲノム研究等による多数の共同論文(Nature 他)の発表実績を活かし、特色ある世界レベルの先端的研究を推進する。また、医学の先進的な医療技術を獣医学へ提供し、獣医学の高度な動物実験を医学に提供するなど双方向で技術提供の実績や、小動物から大中実験動物まですべての動物を扱える実験施設を利用し、基礎から臨床へのトランスレーショナルリサーチの展開を推進する。

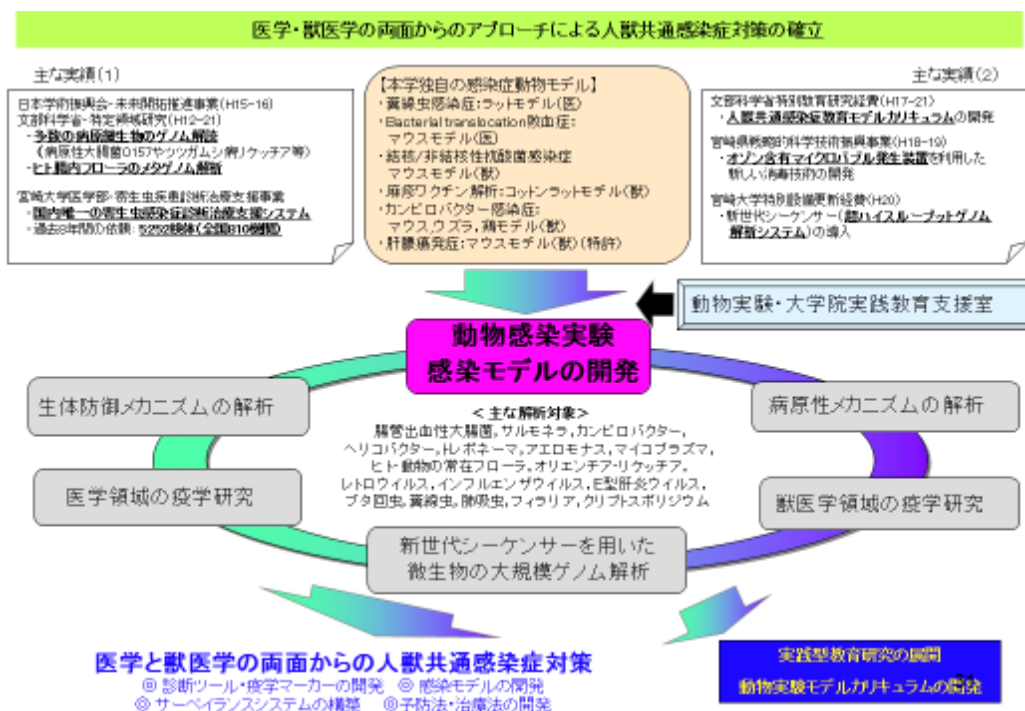
○医学と獣医学の研究者が組織的に連携して研究を推進し、特に動物実験を中核として、基礎から橋渡し・応用研究を行う。

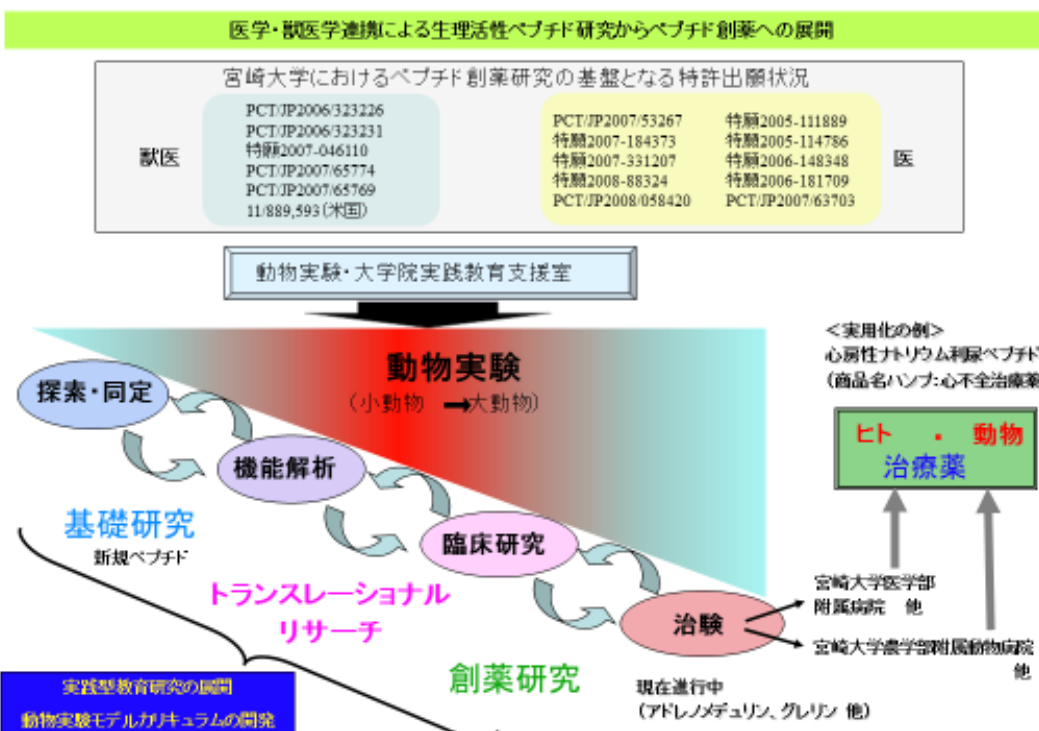
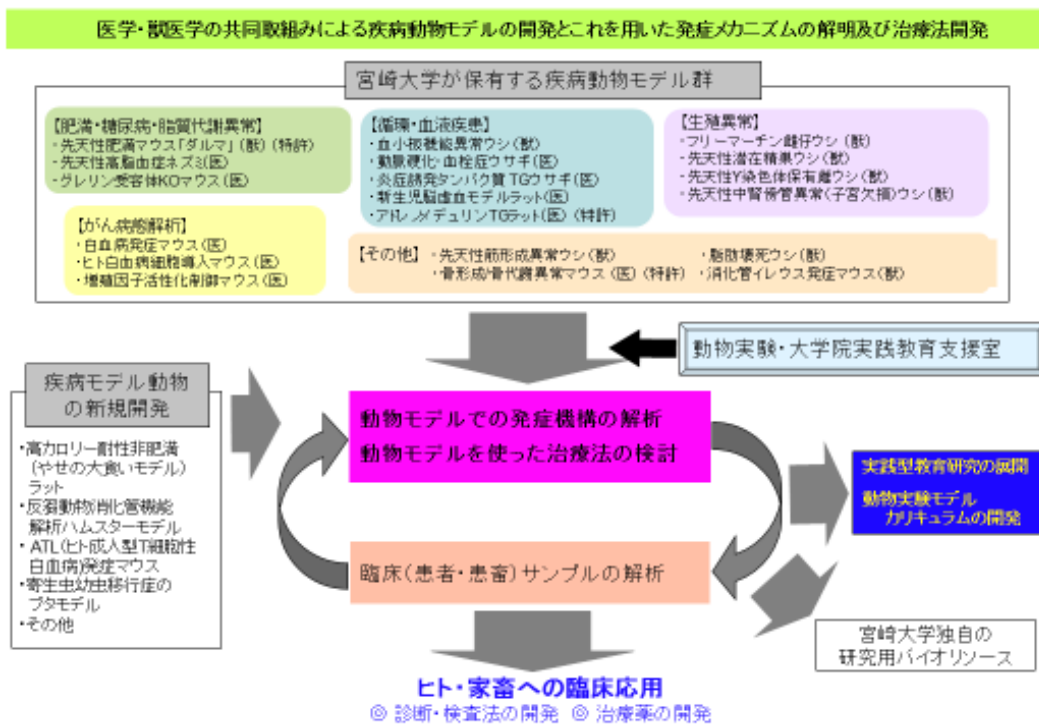
○ヒトおよび動物の各種疾病に対する新規予防・診断・治療法として社会への還元を目標とする。既に、実用化が可能な口蹄疫やヘリコバクターなどの迅速診断系の開発等に成功しており、平成23年度に発生した口蹄疫が終息した後にも多発しているウシ伝染性蹄病の調査と収集したサンプルのメタゲノム解析やSFTSウイルスに関する疫学調査研究を進めることで、地域貢献と先端技術が融合した新たな研究のタイムリーな展開も期待される。

2. 自己点検評価

分析項目1. 研究活動の状況

①研究推進体制の状況





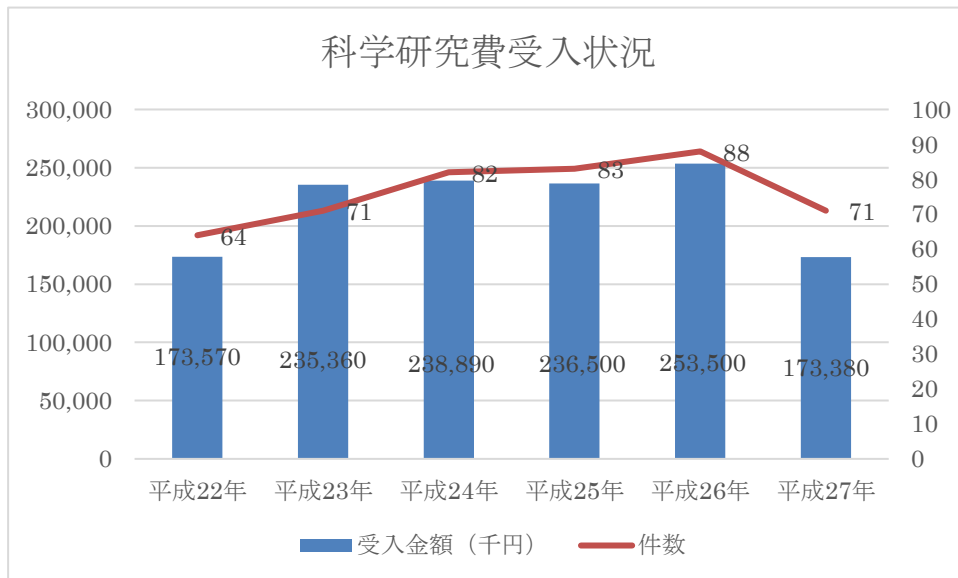
②研究成果による知的財産権の出願・取得状況

- ・平成 26 年度の知的財産権の出願状況は 11 件、登録は 9 件であった。
- ・平成 27 年度の知的財産権の出願状況は 13 件、登録は 28 件であった。

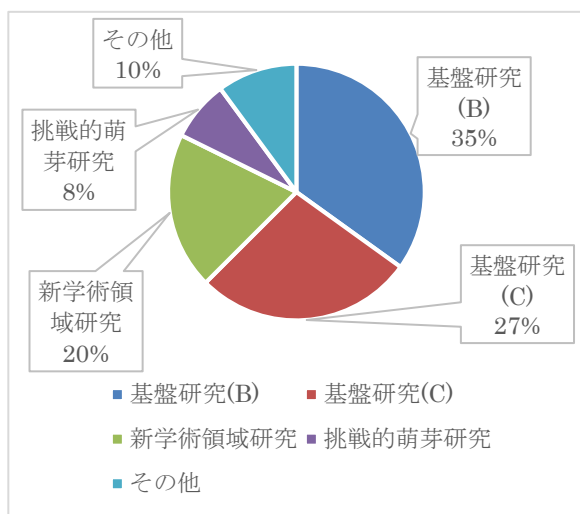
③外部資金等による研究実施状況、外部資金等の受入状況

本研究科は、医学部医学科、農学部獣医学科、フロンティア科学実験総合センター及び産業動物防疫リサーチセンターの教員の内、資格審査によって認められた研究指導教員 64 名、授業担当教員 39 名の合計 103 名（平成 27 年 5 月 1 日現在）によって構成されている。

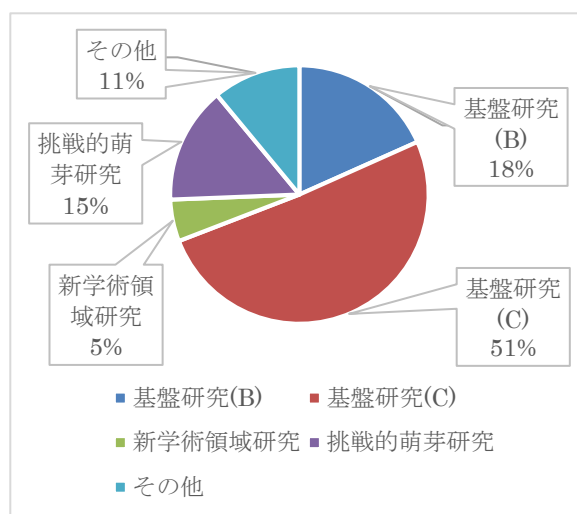
研究活動においては、以下に示す研究業績があり、また、研究活動を活発に進めるために外部資金を獲得した。



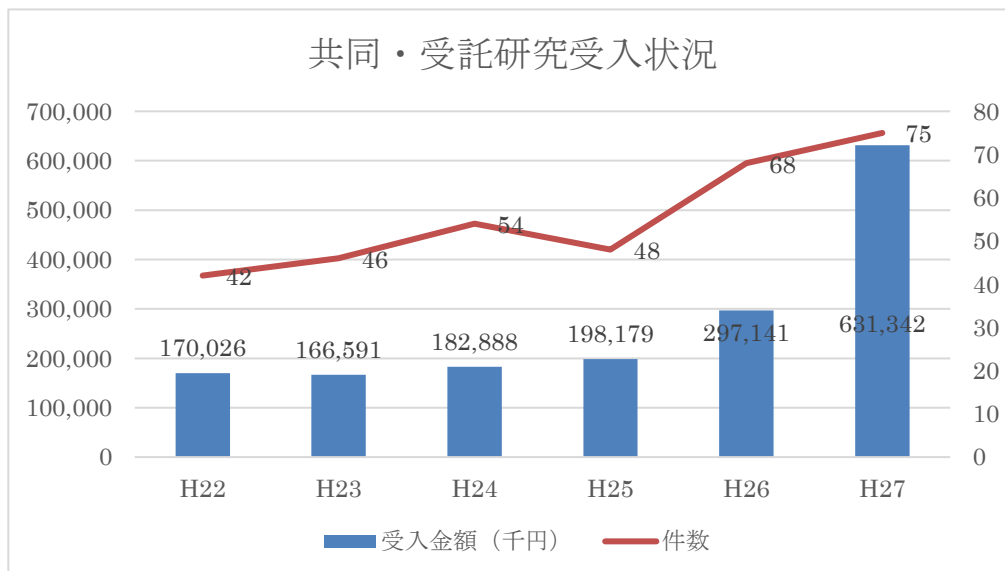
科学研究費受入金額の割合



科学研究費受入の割合



共同・受託研究受入状況



分析項目 2. 研究成果の状況

①組織単位で判断した研究成果の質の状況

医学獣医学総合研究科においては、平成 22 年 4 月に、文部科学省特別経費（大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実）のサポートを受けて実施する宮崎大学医学獣医学総合研究科の研究教育プロジェクトを実施した。

平成 22 年度に我が国で初めて本学に設置された医学獣医学総合研究科では、互いの研究を融合連携させることが容易となり、これまで成しえなかった新たな領域へ研究を展開することも可能となった。特に、動物実験を有効に活用できる研究課題については、飛躍的な発展が望める状況にある。そこで、本プロジェクトでは、本学の医学および獣医学において進めてきた様々な研究の中から、本学の地域特性、教育研究実績、社会的緊急性等を踏まえ、医学系と獣医学系の研究者が協働して行う動物実験を核として、両者のこれまでの研究基盤を融合させることによりスパイラルアップ的な新展開を図ることができる研究内容に着目し、その結果、平成 22 年から 24 年度までは 22 件、平成 25～26 年度は 20 件の医学獣医学共同サブプロジェクトを採択し、医学と獣医学が連携した研究が行われた。

よって、その結果としては、原著論文（264 件）、著書（36 件）、総説（66 件）、学会発表（521 件）の成果があった。

また、プロジェクトの成果は平成 25 年 5 月 10 日に「医学獣医学融合による統合動物実験研究プロジェクトシンポジウム」を開催し広く学内外の参加者に研究内容について紹介するとともに、平成 27 年 2 月 13 日に宮崎大学大学院医学獣医学総合研究科 設立 5 周年記念シンポジウムを開催し、その中でサブプロジェクトの研究成果について発表した。

（参考：<http://www.miyazaki-u.ac.jp/ijudaigakuin/pj/index.html>）

②重点的な研究の実施状況

- ・医学獣医学連携による生理活性ペプチド研究や病原微生物ゲノム研究、宮崎県の特性に即した HTLV-1 ウイルスや ATL、寄生虫疾患診断等の研究を推進している。
- ・生理活性ペプチド研究の分野では、新規ペプチドの探索から臨床応用までの幅広い研究を実施している。特にアドレノメデュリンに関しては、AMED の研究費により炎症性腸疾患治療薬として開発するための医師主導治験が推進されている。
- ・独立行政法人科学技術振興機構「戦略的創造研究推進事業（CREST）」、「大学発新産業創出プログラム（START）（プロジェクト支援型）」、「成果最適展開支援プログラム（A-STEP）」等の大型研究費を獲得し特色ある研究を推進している。
- ・東九州メディカルバレーに関しては、地場企業との複数の共同研究を実施し、一部では本学の大・中動物実験施設（産業動物教育研究センター）も利用して推進している。

第 3 節. 社会連携・社会貢献活動

1. 社会連携・社会貢献活動の目的と特徴

地域ニーズに応じ、教員の特色を生かした社会連携・社会貢献活動を実施している。

2. 自己点検評価

分析項目 1. 社会連携・社会貢献活動の状況

○社会連携・社会貢献活動事例（平成 26 年度～平成 27 年度）

- ・口蹄疫ウイルスの国内侵入の危険性を一般市民へ理解してもらうため、宮崎大学市民公開講座『海外渡航上の留意点～口蹄疫ウイルスを持ち込まないために～』を開催し、口蹄疫について正しい知識、特に、口蹄疫発生国等への海外渡航に際し、その防疫への理解を得るための近隣諸国における発生状況などについて情報発信を行った。
- ・医学獣医学総合研究科設立 5 周年記念シンポジウムを開催し、開設から 5 年間の研究成果を発表した。
- ・口蹄疫による災禍を再び繰り返さないように県畜産新生推進局畜産振興課と連携し、産業動物防疫リサーチセンター主催で企画展示「口蹄疫予防展～心をつなぐ防ごう口蹄

疫～」を県立図書館にて開催し、研究科教員が開催に協力した。

- ・人獣共通感染症プロジェクトとして、宮崎県においても発生が確認されている新興感染症、「重症熱性血小板減少症候群（Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome：SFTS）」の問題について医学と獣医学の両面からわかりやすく解説する教育セミナーを開催した。

- ・宮崎県民を対象として、HTLV-1 ウイルス感染症から、それによって引き起こされる ATL 等の病気についての最近の知見の紹介及び宮崎県や宮崎大学が現在行っている対策について理解をしてもらうため、宮崎大学公開講座『HTLV-1 感染症から ATL へー宮崎における HTLV-1 感染症への対策について』を 11 月 14 日に開催し、情報発信を行った。

- ・宮崎県を対象として、毎日の暮らしに役立つ医学の知識について分かりやすく紹介する宮崎大学公開講座「くらしと医学-みなさんは、毎日の暮らしをすこやかに過ごせていますか？」を 5 テーマに分けて 5 日間実施し、情報発信を行った。

- ・宮崎県との連携により推進している「みやざき科学教育推進事業」の一環として、県内の中・高校生を対象とした宮崎サイエンスキャンプ「科学どっぷり合宿」において、実験・講座等を継続開催し、体験型学習活動を通じた理科大好き青少年の育成に取り組んだ。

- ・放射線に関する基礎知識の普及及び防災体制の確立を目的とした研修会並びに防災訓練事業を実施し、現場の消防活動、警察活動について検討し、地域と連携した危機管理体制の確立を目指すと共に、放射線災害時に備えて測定装置の使用手法や評価の研修を行った。

- ・宮崎県・大分県が推進している産官学連携による『東九州メディカルバレー構想』において、海外への日本の先進医療技術の展開活動を行っている地域の医療系大学や民間の医療機器メーカーと共同研究を進めている。

- ・「口蹄疫復興対策運用型ファンド事業」や「レギュラトリーサイエンス新技術開発事業」の研究プロジェクトに継続的に取り組み、復興ファンド事業において作成した「家畜防疫動画マニュアル」を自治体、獣医師会、民間企業及び大学等へ配布した。

- ・野鳥の鳥インフルエンザウイルス保有調査、農場における豚流行性下痢の疫学研究、牛白血病や食中毒細菌の清浄化に関する研究等に取り組み、その成果がマスメディア等でも取り上げられた。

- ・口蹄疫発生後に全国で開催された豚流行性下痢防疫、口蹄疫防疫、高病原性鳥インフルエンザ防疫及び牛白血病清浄化等の各種防疫講習会に講師を派遣し、防疫の重要性について普及に努めた。

- ・社会貢献取組状況（H26・H27）・・・※COC 地域貢献状況調査票より

取組内容	合計
地域機関における専門委員としての参加	61
県内自治体、教育機関連携事業の実施	111
依頼講演	110
市民シンポジウム	62

分析項目 2. 社会連携・社会貢献活動の成果

上記以外においても、医学獣医学総合研究科の教員がそれぞれの専門を生かし、さまざまな分野において地域・社会貢献（講演、各種委員、各種役員、共同研究、研究相談、委託事業、検査・診断依頼等）を実施しているとともに、全学的取組の一環として包括連携協定を締結している機関と協力し、教育・研究成果の活用及び人材の提供を通じた取り組みを実施している。

また、地域社会において、宮崎大学が地方公共団体や企業などと連携して様々な取組を展開し、地域のニーズを踏まえた教育研究を行っていくことにより、地域の発展に貢献していくこ

とが、大学の果たす社会的貢献の一つとして重要になってきており、今後も地域の課題解決を推進していくこととしている。

第4節. 国際化活動

1. 国際化の目的と特徴

産業動物防疫リサーチセンターによる感染症防止の国際シンポジウムの実績や JICA プロジェクトなどの実績を生かし、国際交流協定の下、各教員が、それぞれの分野において国際化活動を実施している。

2. 自己点検評価

分析項目 1. 国際化活動の状況

①国際化に対応可能な組織体制の整備及び教育研究情報の国際的な発信の状況

清武キャンパスにおける国際交流事業の円滑な運営とグローバル化の推進のため、平成 26 年 4 月に医学部国際交流室を設置した。また、各講座等の英語版ホームページをリニューアルし、興味をもつ留学・研修希望者が容易に情報を得ることができるようにした。

②教育研究の内容・方法の国際化の状況

○「留学生に対する授業実施方法について」の申し合わせを作成しており、授業を行う教員に配付するなどして周知を図り、留学生に対する教育の質の向上に努めている。

○学生が自ら運営するセミナー（サイエンスコミュニケーション特論）を定期的で開催している。セミナーでは日本人学生と外国人学生が交代で発表、司会・進行を行うことから、国際学会のような雰囲気の中、研究発表のスキルやコミュニケーションスキルを実践的に身につけることが可能となっている。

③外国人の学生の受入状況

修士の留学生については、以下の表のとおりであり、学生の約 3 割が留学生である。

入学年度	入学者総数	留学生	備考
H26	16	4	私費 4 名（ベトナム 2 名、中国 2 名）
H27	15	6	私費 4 名（アフガニスタン 1 名、インド 1 名、インドネシア 1 名、モンゴル 1 名、中国 1 名）、国費 1 名（マレーシア）

④日本科学技術振興機構（JST）が実施する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（通称：さくらサイエンスプラン）」の実績

平成 26 度に 2 件、27 年度に 3 件を関係教員が受け入れ、講義、実習、見学、文化交流などを行った。

国名	相手機関	受入人数	期間
ミャンマー	保健省 医科学局	10	2015/1/18～2015/2/5
タイ	チュラロンコン大学 国立動物衛生研究所	10	2015/1/25～2015/2/7
ミャンマー モンゴル	保健省 医学研究局 モンゴル国立医科学大学	10	2015/11/25～2015/12/11
インド	ニッテ大学	11	2015/10/3～2016/10/18
インドネシア	ボゴール大学	10	2016/1/29～2016/2/7

⑤海外の大学等との研究者交流の実施例

○ジェトロを通じて、「海外有識者招へい事業（タイ）」を実施し、東九州メディカル構想特区が誇る高い技術力や産学官連携による人材育成の取組を紹介する等、県内の医療機器メーカーと協力して研修を行った。

○平成27年から、JICA 草の根技術協力事業「ミャンマー国砒素汚染地域における衛生保健の実施体制強化プロジェクト」を開始し、宮崎大学とミャンマー国の保健省、畜水産・地方開発省及び地方行政などの複数省庁と協働する画期的な事業として実施を開始している。

○JICA からの助成のもと、平成26年9月1日から9月26日までの約1ヶ月間、口蹄疫防疫対策上級専門家育成事業を実施し、ウガンダ、ミャンマー、ブラジルから4名の研修生が参加した。さらに、グローバル人材育成の一環として、国内の大学に所属する日本人2名の大学院生も本研修に参加し、29名の講師による講義、実習、見学、文化交流などを行った。

○平成23年度から「国境なき家畜伝染病防疫対策の取り組み」をテーマに、国内外の研究・行政機関の関係者が参加し、各国の現状及び防疫対策や最新の研究成果の情報共有を図っている。

○平成27年2月に「国際防疫戦略のハーモナイゼーション ―One world, one health に向けた取り組み―」と題した第4回国際シンポジウムを東京国際フォーラムで開催した。本シンポジウムは、口蹄疫発生後の5年間の宮崎県の歩みを振り返るとともに、アジア地域における国際的な防疫の取り組みと課題について理解を深め、今後、更にアジアの関係機関とも連携して越境性感染症の制圧に資することを目的として開催し、7か国から250人が参加した。また、本シンポジウムに併せて、国内外の客員研究員による国際防疫コンソーシアム会議を開催した。

○平成27年11月に「迫り来る感染症への備え―人獣共通感染症に焦点を当てて―」と題した第5回国際シンポジウムを宮崎市で開催した。「国境なき人獣共通感染症」として、エボラ出血熱、狂犬病、デング熱、MERS、Q熱、重症熱性血小板減少症候群、高病原性鳥インフルエンザを取り上げ、招聘したアジア近隣5か国、英国、ベルギー、米国の専門家が講演した。本国際シンポジウムの開催は今回で5回目となり、産業動物防疫リサーチセンターが目指している国際防疫コンソーシアム構築へ向けての国際ネットワーク作りが着実に進められたことは、本シンポジウムの大きな成果である。また、本シンポジウムに併せて、国内外の本センター客員研究員・客員教授等による第2回国際防疫コンソーシアム会議を開催した。

分析項目2. 国際化活動の成果

各教員が、それぞれの専門分野を生かし、国外の大学・研究機関と共同研究を行っており、本研究科教員が主体となって協定を実施した機関については、平成26年度以降、新規に15件が増加している。

また、これに併せて、今後、外国からの入学希望者も増加していくと思われる。

協定一覧（平成26年度以降新規）

タイ	動物衛生研究所
タイ	マヒドン大学熱帯医学部
ベトナム	ノンラム大学
ペルー	カジェタノ・エレディア大学医学部、附属熱帯病医学研究所
ベルギー	リエージュ大学
ミャンマー	ミャンマー保健省
ミャンマー	ミャンマー牧畜水産・地域開発省畜産繁殖局
ミャンマー	ミャンマー科学技術省高等科学技術局
ミャンマー	ミャンマー獣医科大学
ミャンマー	パテイン大学
ミャンマー	ヤンゴン歯科大学
ミャンマー	ヤンゴン第一医科大学

モンゴル	モンゴル国立医科大学
英国	パーブライト研究所
韓国	忠北大学校医学部

第5節. 管理運営体制及びその他

1. 自己点検評価

分析項目1. 管理運営体制及びその他の状況

○医学獣医学総合研究科に、研究科長、副研究科長及び専攻の各コースにはコース長を配置し、その管理運営を行っている。また、研究科長の選考は、研究科委員会において選挙により選出し、学長が選考を行っている。

重要事項の審議は、専任の教授で組織する医学獣医学総合研究科委員会で決定することとしており、原則として毎月1回の開催を実施している。研究科委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、原則として出席委員の過半数の同意をもって議決することとしている。

なお、研究科の運営を円滑に行うため、研究科委員会の下に、研究科長、副研究科長、各コース長、各コースを担当する専任教員等で組織する研究科運営委員会を設置している。研究科を担当する教員については、研究科委員会において資格審査を行っている。また、教育活動の質の向上を目的とした教員間相互授業評価を実施している。

第5章. 設置又は改組による成果

本研究科は、平成22年4月に設置されると同時に研究教育プロジェクトも発足し、医学・獣医学の領域を生かした特色のある成果が得られている。

平成27年10月に実施した外部評価（委員：大分大学長、麻布大学長、県内医師・獣医師の会長、宮崎県商工観光労働部長、JA 宮崎経済連常務理事）においても「医学系と獣医学系それぞれの異なる系統の教員が綿密に連携し、フロンティア科学実験センターや産業動物防疫リサーチセンター等の特色あるセンターを生かした研究が推進され、さらに大学院生の充足についても十分に満たしている状況であり、設置の目的に沿った結果が挙げられている。」との高い評価を受けており、関係者への期待に十分応える成果を挙げていると言える。

なお、一方で、本学研究科の修士課程の充足率については、以下の表のとおりであり、定員を大きく上回る状況となっている。

年度	定員	入学者	充足率
H26	8	16(4)	200%
H27	8	15(6)	187.50%

これまで述べてきたように、今後は、特に国外の大学等との交流がますます充実していくことにより、外国からの志願者が増加することが予想される。

また、平成27年度においては、初めての修了生がでることとなり、長期履修申請者2名を除く14名の修了予定者のうち、13名が学位を取得して修了している。

よって、この修了者の実績もあることから、本学研究科修士課程への高い進学ニーズに応え、医学・獣医学領域の生命科学研究者や高度の医療支援技能者を目指す人材を広く受け入れる機会を提供するためにも、入学者の定員増を検討していく必要がある。

については、定員増を行うことにより、より多くの有為な人材を輩出し、地域や国際社会への人的貢献を果たすことが、本研究科修士課程の使命であると考えられる。